

## どうしたら主のしもべになれるか

2006. 11. 14 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

イザヤ書 6章1節から8節

ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ち。」その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

コリント人への手紙・第二 6章4節から10節

あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しているのです。すなわち非常な忍耐と、悩みと、苦しみと、嘆きの中で、また、むち打たれるときにも、入獄にも、暴動にも、労役にも、徹夜にも、断食にも、また、純潔と知識と、寛容と親切と、聖霊と偽りのない愛と、真理のことばと神の力とにより、また、左右の手に持っている義の武器により、また、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたり、好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。私たちは人をだます者のように見えても、真実であり、人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであっても、殺されず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。

沖縄のよるこびの集いは、大変恵まれました。(27℃もありましたが。)新潟の集会は非常に寒かったらしいですね。

沖縄では宮古島からも参加した方がいましたし、個人的にゆっくり話すことができた人も十九人でした。もちろんそういう人たちが、その時に心を開いても、また祈ったとしても、その後みことばに頼らなければ、あるいは兄弟姉妹と交わる必要性を知らなければ、

信仰の成長には問題ではないでしょうか。ですから、あの十九人のために特別に祈ってください。

今日は、ひとつの質問について、いっしょに考えてみたいと思います。すなわち、「どうしたら主のしもべになれるのか」です。

救われた人々は、もちろん用いられる器とならなければなりません。生ける神のしもべとなることこそ、救われた者の目的です。

パウロは、テサロニケにいる兄弟姉妹に書くことができたのです。あなたがたは生けるまことの神に仕えるようになった。そして信じるようになっただけではなく、主に仕えることこそ最高の特権である、と。御霊は私たちに対しても、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえられた方のために生きるためである、と語っています。

では、私たちは主のしもべになることができるのでしょうか。本当の奉仕の源とはいったいどこにあるのでしょうか。

主に仕えるためには、従わなければならない法則があります。これから離れて、まことの奉仕はありません。主は、みことばをもって、この法則を私たちに教えておられます。そしてこの法則は、救われるために知らなければならない法則と同じほど、奉仕になくってはならないものです。

救いの条件とは、みなさんご存じですが、「イエス様の死とよみがえり」にあり、私たちはこれを幼子のような心をもって受け入れ、これを感謝することです。

私たちはどのようにしてキリストのものになったのでしょうか。聖書を勉強することによってでしょうか。祈ることによってでしょうか。また、集会に出席して、より良い人間になろうと努力したからなのでしょうか。そうではありません。イエス様が、私たちの罪咎のために死なれ、よみがえられたことを知り、心の目が開かれ、イエス様に感謝して、救いの確信を与えられました。この救いの法則を、少し取り違えても、「まことの救い」はありません。

以上述べましたことを、三つの点に分けて考えたいと思います。

第一番目。奉仕の法則とは何でしょうか。それは、「死とよみがえり」を体験すること。

第二番目。奉仕の力とはどういうものなのでしょうか。それは、御霊の力に頼ること。

第三番目。奉仕の目的とはいったい何でしょうか。それは、イエス様だけに喜ばれること。

\* 第一番目の質問 奉仕の法則とはいったい何でしょうか。

奉仕の法則は、「イエス様の死とよみがえり」を自分のものとして受け止め、体験することです。この法則を自分のものとしていない限り、あらゆる奉仕は価値がなく、永遠の実を結ばないものとなるのです。

それでは、死とよみがえりを通して行くとは、いったい何を意味しているのでしょうか。

「罪から来る報酬は死です。(ローマ書 6 : 23前半)」というみことばがありますが、滅びゆく私たちを救うために、イエス様は犠牲になられ、身代わりとなられて死なれたのです。イエス様が私たちの身代わりになられ、血潮を流してくださいました。たとえ人間が何と言おうと、私たちの心にどんな疑いが起こっても、悪魔が訴えて来ても、イエス様の血潮は父なる神のみこころを満足させましたので、私たちはイエス様にあって感謝することができるのです。

しかし、「イエス様の死とよみがえり」は、さらにまさった意味をもっています。主イエス様は、私たちの罪のためだけではなく、罪の性質のためにも死んでくださったのです。私たちの古き人は、イエス様とともに十字架につけられてしまったのです。私たちは自分の罪については死んだもの、主に対しては、キリスト・イエスにあって生きたものと思ひ、主に喜ばれるために仕えてきました。

やがて、ローマ書7章の戦いがやって来ました。私たちは聖い者でありたい、主に仕えたい、主にささげたい、と一人一人心から願いますが、その努力もむなしく、「ああ、我悩める人なるかな！」と叫ばざるを得ない自らのさまに気付きます。私たちは、主に仕えることができないばかりか、自ら聖い生活を送ることすらできません。ローマ書7章は、私たちにそれを教えています。これを知るためには大きな悩み苦しみを経験することが必要です。まことの主なる神のしもべとなるためには、それがどうしても必要です。

ご奉仕をするために一番大切な準備は、いったい何でしょうか。それは聖霊をそそがれ、聖霊に満たされることです。けれど、聖霊はいつおいでになったのでしょうか。イエス様が死んで、よみがえられ、父なる神の右に座され、聖霊がくだりました。聖霊はかつて一度全教会に降り注がれましたが、私たちがこれを個人的に受けるには、「イエス様の死とよみがえり」を個人的に体験しなければならないのです。

旧約聖書の時代に、もう既に「死とよみがえり」を体験した主のしもべたちがいました。モーセについて次のように書いてあります。

出エジプト記 4章10節

モーセは主に申し上げた。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」

前に読んでいただきましたイザヤ書6章を見ても、結局内容的には同じです。

イザヤ書 6章5節

そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見ただから。」

9節前半

すると仰せられた。「行って、この民に言え。」

ギデオンは同じことを経験しました。聖書は記しています。

士師記 6章15節

ギデオンは言った。「ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができますしょう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。」

34節前半

「主の霊がギデオンをおおったので、…」

とあります。聖霊がギデオンを着た、とありますが、これは私たちが着物を着ると着物は外側に見えます。それと同じように、ギデオンが着物のように外側になり、聖霊がギデオンの中に宿ったのです。

エレミヤも同じことを経験しました。

エレミヤ書 1章6、7節

そこで、私が言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。…」

アモスも同じことを経験しました。

アモス書 7章14、15節

アモスはアマツヤに答えて言った。「私は預言者ではなかった。預言者の仲間でもなかった。私は牧者であり、いちじく桑の木を栽培していた。ところが、主は群れを追っていた私をとり、主は私に仰せられた。『行って、わたしの民イスラエルに預言せよ。』と。」

これらの旧約聖書における主のしもべたちは、主のご奉仕は自らの力ではできるものでなく、聖霊ご自身の力なくしてはできないことを悟らせられたのです。ご奉仕は聖霊自らがなさりたいと願っておられます。私たちの生まれながらの才能、賜物は、死とよみがえりを通らなければ、決して主のために役立ちません。生まれながらの賜物、教育、教養、これらのものをもって奉仕しても、もし「死とよみがえり」を通っていなければ、永遠に残る実はありません。

旧約の時代においてモーセは、生まれながらの教育、能力を多く持っていました。彼は熱心であり、また勇気があり、すばらしい知識を持っていたのです。イザヤもエレミヤも、良い教育を受け、社会的な地位、名声も持っていたと思われます。新約時代になって、パウロは最高の学問を身につけた人でした。アモスやギデオンは、これに対しあまり教育を受けていない平民でした。また主の弟子たちは、普通の教育を受けた貧しい人々でした。

社会的地位もそんなに高くありませんでした。普通の人でした。

けれども、主に仕えたこれらの人たちは、一人残らず、同じ体験を持っていたのです。つまり、「死とよみがえり」を体験していたのです。

主は、人間の生まれつきの力を用いようと思っておられません。主はまず働き人を霊的な破産に導き、その人を通して、主ご自身が働きたく願っておられるのです。イエス様がその模範を示してくださいました。

イエス様の公の奉仕はいつ始まったのでしょうか。洗礼の後でした。洗礼は、「死とよみがえり」を教えています。イエス様が洗礼をお受けになると、天から聖霊が鳩のようにくだり、イエス様は聖霊の力に満たされ、それからまことのご奉仕が始まったのです。

私たちはどのようにしてイエス様に仕えようとしているのでしょうか。イエス様は弟子たちに、「上からの力を授けられるまでは、また、よみがえりの力を受けるまでは、あなたがたは都にとどまりなさい」と言われました。ただ「聖霊があなたがたにくだるとき、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤ、サマリヤの全土、さらに地の果てまでわたしの証人となる」と。ただ聖霊によってのみ、まことの主の仕え人となることができます。

聖霊はいつ、私たちを用いることができるのでしょうか。「死とよみがえり」の体験の後に用いてくださるのです。

つまりご奉仕の法則は、イエス様の死とよみがえりを、おのれのものとして受け止め、体験することです。この法則を自分のものとしていないかぎり、あらゆるご奉仕は価値がなく、永遠の実を結ばないものになってしまうのです。

\*第二番目の質問。ご奉仕の力とはいったいどういうものなのでしょうか。

「自分の力をもって、主に仕えるまことのご奉仕ができるかどうか」ということについて、ちょっと考えたいと思います。

私たちは自分で主のために何かすることができるか、また生まれながらのものをもって主に仕えることができるか。しかし主はそれをお望みになられるか。この問題を解決することが大切です。もちろん、私たちの生まれながらの悪い性質は、主のご奉仕に役立ちません。けれど、私たちのいわゆる良い意志は、ご奉仕の役に立つのでしょうか。良き理性、良き信念、これらは奉仕に役立つのでしょうか。

イザヤは、主に向かって、「ああ、私はもうだめだ。私は汚れた者です」と叫びました。汚れとは、自らの力と聖霊の力が混じり合っている状態です。聖さとは、完全に聖霊の支配のもとに入ることです。私たちは、「私は汚れた者です。主よ、私から離れてください」と言わないではいられない状態ではないのでしょうか。私たちは、イザヤが、「わざわざかな」と自らの状態を見て叫んだように、叫んだことがあるのでしょうか。そこまで叫んだのでしょうか。

日曜日の朝、沖縄の兄弟に司会を頼んだのです。けれど彼は正直に言ったのです。「私はぺちゃんこです。みなさん、私はどうしようもない者です」と。私は「兄弟、おめでとう！」としか言えませんでした。自分はもうだめだ、と分かった人が増えて欲しいと思います。多く的人是ぐ言います。「私はだめです」と。けれど、もし他人が「あなたはだめだ」と言うと、あまりいい気持ちになれないのではないのでしょうか。(笑) 司会の兄弟は多分本当に心からそう思ったのでしょうか。素晴らしいことです。

イエス様ご自身は何と言われたかと言いますと、「わたしは自分からは何ごともすることができない。子は、父のなさることを見てすること以外に、自分からは何ごともすることができない」と。これはイエス様の告白であり、証しです。イエス様は、罪のないお方であられたにも関わらず、自ら語られたり、自ら事を成そうとはなさいませんでした。罪のないイエス様でさえ、神のしもべとなるためには、み父に全き拠り頼みをなさらなければならなかったのです。私たちは、自らの力ではどんな小さなご奉仕もできないということを悟らなければなりません。

聖霊だけが私たちのうちに働かれ、ご奉仕をなさり、目標を達成なさるお方であることを知りましょう。自らの力でなすご奉仕は一時的なものであり、決して主のご目的を達成することはできないのです。また、主のみこころをお喜ばせすることもできません。

士師記の中に、次のような個所があります。

士師記 7章2節

そのとき、主はギデオンに仰せられた。「あなたといっしょにいる民は多すぎるから、わたしはミデヤン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救った。』と言って、わたしに向かって誇るといけないから。」

パウロも、コリントにいる人々に書いたのです。

コリント人への手紙・第一 1章31節

まさしく、「誇る者は主にあつて誇れ。」と書かれているとおりになるためです。

と。

すべての栄え、すべてのご栄光がイエス様に帰せられることが大切なのです。「救い」のときに、主は私たちのためにすべてをなしてくださいました。人のいさおしは何もそこにあずかってはいませんでした。私たちは贈り物として、「永遠のいのち」をいただきました。もし救われるために自分で何かをしようとするなら、それはすべて妨げになったはずです。ご奉仕の場合も、これとまったく同じです。主はご自身の働きに、人の力を求めてはおられません。

イエス様は聖霊によって人の心に住み、その力によって自ら働こうと思っておられます。そうすることにより、すべての栄光をご自身に帰そうとなさっておられます。しかし聖霊が私たちのうちに働くご奉仕は、私たちが死を通らなければできないのです。あれほど頭のいい才能のある人がイエス様を信じるなら、どんなに素晴らしいご奉仕をするだろうと

人々は考えます。けれどそれは当たりません。あるキリスト者がどんなに人当たりがよく、素晴らしい判断力を持ち頭が良くても、それが生まれながらのものであるなら、イエス様の前に益とすることにはなりません。

イエス様は言われました。

ヨハネの福音書 3章6節

**肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。**

すべて聖霊のご支配のもとにない生まれながらのものは、肉であり、人に栄光を帰するものです。

主なる神へのご奉仕で一番大切なのは、ご奉仕の力がどこから出ているか、その源が大切です。私たちが何と何をするかは、大きな問題ではありません。しかし、何の力で奉仕をなすかが問題です。私たちが何をするか目標を考えると、目標を達成するための手段はあまり考えません。目的のためには手段を選ばず、ということばがありますが、そのとおりに行なってしまいます。多くの人が主のために奉仕しますが、自らの力でそれをするなら、主はお喜びになりません。

ヨハネの福音書 15章5節後半

**わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。**

ここに、甲乙二人の兄弟がいます。甲は非常によく話をするのでできる兄弟ですが、いざ実際の仕事をすると、何も出来ません。これに対し、乙は口下手ですが、実際になると何でも出来る兄弟です。二人がどこかの集會に招かれ、話すように言われたとします。甲はうまく話せます。もちろん甲は祈ると思いますが、乙ほど熱心には祈らないでしょう。乙は自分が口下手であり、うまく話せないことをよく知っていますから、ひたすら「主よ、もしあなたが助けてくださらなければ私はだめです」と思って、心から叫ぶことでしょう。

今度は逆に、二人とも実際の働きを頼まれたとします。するとどうでしょうか。乙は自分の得意とするところですから、さほど主の御前に叫びません。しかし甲は自分の無力を覚え、ひたすら祈るでしょう。このように考えるとき、甲乙二人とも主の御前に全くご奉仕をなしていないことがわかります。自分の力に頼って頑張れば、主は悲しまれるに違いありません。

今引用したヨハネ伝15章5節は、本当に大切です。

ヨハネの福音書 15章5節後半

**わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない。**

本当にそうでしょうか。私たちは、自分で聖書を読み、祈り、集會をもつことができるように思えますが、このことばの意味するところは、「もしイエス様無しに事をするなら、その結果は何の価値もなく、実が残らない」ということなのです。イエス様が私たちのうちに働いてなされたご奉仕でない場合は、やがて木や藁のように焼けて無くなってしま

でしょう。イエス様がそうおっしゃっておられるのです。それを真面目に受け取らなければなりません。「わたしから離れてはだめ。全部、的外れです」と。

私たちは自らの力で何か出来るでしょうか。「もし、それが主をお喜ばせることにならなとすれば、しない」。そこまで私たちは主に拠り頼みたいものです。私たちはいろいろな賜物を持っているとしても、イエス様に全く拠り頼みたいものです。イエス様の役に立つまことのしもべになりたいものです。

主のみこころにかなうご奉仕の力は、私たちのうちに住み給う「聖霊の力」です。このことを学ぶためには、私たちは悩みや、苦しみを通らなければなりません。

モーセは四十年の長い間、荒野で羊を飼っていました。働き盛りの力に満ちたモーセにしては、まことに物足りない仕事だったに違いありません。モーセは、荒野に逃げる前、イスラエルの民を救おうとしました。その目的は良かったのですが、方法が間違っていました。モーセが荒野で学んだことは、自らの力は主のご奉仕のためには、何の役にも立たないということでした。

イザヤも、主にお会いしたとき、自らの無力さを深く悟りました。エレミヤも同じです。パウロも、自らの学問や才能は全く無力なものと悟りました。

主に対する全き拠り頼み、信仰、従順、へりくだり、忍耐、これらは、本を読んだり、説教を聞いても自分のものにはなりません。これらはただ、苦しみを体験することによってのみ、自分のものとする事ができるのです。

今学んだように、

奉仕の法則は、「イエス様の死とよみがえり」を己のものとして受け止め、体験すること。

そして、主のみこころにかなう奉仕の力の源は、生まれながらの能力、力ではなく、私たちのうちに住んでおられる「聖霊の力」だけなのです。

\*第三番目。奉仕の目的はいったい何でしょう。

すべての奉仕の目的は、「イエス様だけ」、この一点でなければなりません。「地にはあなたのほかに慕うものは無い」と、まことの主のしもべは言っています。

「イエス様のほかに何も必要としない」、それが私たちの心の態度でなければなりません。その際に、私たちは聖霊の力と、私たちの自らの力との区別を、はっきりと知る必要があります。

聖霊の力は、主の力、天的な力、霊的な力であり、また、まことの主のしもべは、この力に導かれていなければなりません。

自らの力は、人間的、世的、肉体的であり、「いわゆる神のしもべ」は、この力に動かされて、奉仕しています。

多くの人は、どうしたら聖霊に導かれているか、いないかの区別ができるかと、たずねます。これらの人は、自らのうちを顧み、自らを分析して、自らの虜になってしまいます。



自らのうちを見つめる時、そこには欺き、絶望、不安、疑いしかありません。自らをどんなに試しても、自らを知ることはできません。

しかし、自らを試すお方は必要です。なぜなら、主のために奉仕をしていると言いながら、実は主の妨げをしている場合が多いからです。

では、どうしたら私たちは自らを知ることができるでしょう。

三つの答えがあります。

1. 主のことばによって。

ダビデは、次のように告白したのです。

詩篇 36篇9節

**いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。**

「あなたの光のうちに光を見る」。私たちは、主の光の中を歩むとき、自らを知り、さらに自らを知るにしたがって、よりよく主を知っていくことができるのです。暗い部屋を掃除するとき、大切なのは「光」です。光がないとき掃除をしても、部屋の中を乱すだけです。

自らの心のうちに、何が善であり、何が悪であり、何が主のみこころであり、何が自らの思いであるかを見分けようとするのは、ちょうど真っ暗な部屋で黒猫を探すようなものです。結果は、失望と落胆になるでしょう。顔が汚いか綺麗かを知るために、どうするでしょうか。手で顔をなでてみるでしょうか。そうではありません。鏡を見ます。どんなに顔をなでて、綺麗か汚いか分からないので、失望し、疑い、不安になってきます。けれど鏡を見ると、すべてがはっきり見え、私たちの不安は解消します。

ダビデは自らを試すことをせず、主に自らを試していただきました。彼の祈りは素晴らしい祈りです。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください（詩篇 139：23）」。主に探っていただいて初めて、善悪を知り、主ご自身をよりよく知ることができるのです。

実際に、その「光」は、どのようにして来るのでしょうか。「主の光」は、多くの場合、今話しましたように、みことばを通して与えられます。

ですから、ダビデは119篇130節で、次のように言ったのです。

詩篇 119篇130節

**みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。**

「みことばの光」によって、私たちはそれまで知らなかった過ちを教えられます。そして、それまで盲目であったことを知ります。みことばは「光」をもたらします。そして、光があるなら、私たちは見ることができます。すなわちヘブル書のみことばが現実となります。

ヘブル人への手紙 4章12節

**神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。**

みことばは、すべてのことを明るみに出します。どうしたら私たちは自らを知ることができるでしょうか。今話しましたように、「みことばによって」です。

2. ほかの信者のことばにより、光を与えられる場合もあります。

人によっては、接するときその人のそばに、イエス様が近くおられることを感じさせます。このような人と交わると、新しい知識が与えられます。そのとき、疑いと失望は去り、喜びと自由をもってイエス様に仕えることができるようになるのです。

私たちは、すべてがイエス様のご臨在を表わすことのできる者でありたいものです。

3. 光のうちに歩むことによって。

よく引用される個所なのですが、ヨハネ第一の手紙 1 章 5 節と 7 節をお読みします。

ヨハネの手紙・第一 1 章 5 節

**神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。**

7 節

**しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。**

ここでは、「主が光であり、主の光の中を歩まなければならない。主の御側近くに絶えずとどまり続けなさい」とヨハネは書いたのです。光のうちに歩む人々が、主のみこころをわきまえ知っている人なのです。

詩篇 43 篇 3 節

**どうか、あなたの光とまことを送り、私を導いてください。あなたの聖なる山、あなたのお住まいに向かってそれらが、私を連れて行きますように。**

と、ダビデは心から祈り、また、叫んだのです。

私たちの心の態度は、常にこの詩篇の作者のようでありたいものです。主よ、私は自らを改める備えがあります。どうか私の誤りを示してください、と。

主が、「光よ。あれ」と言われるなら、今にでも直ちに光が差し込み、恐れおののくことなく、主に仕えることができるのです。「光」とは何でしょうか。

パウロは、エペソ書の中で当時の兄弟姉妹に書き送ったのです。

エペソ人への手紙 5 章 1 3 節、1 4 節前半

**明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。明らかにされたものはみな、光だからです。**

と。

イエス様が光であられるので、私たちも光のうちを歩むとき、初めて主のみこころを知り、主のみこころにかなう奉仕をすることができるのです。

けれど、私たちの奉仕の目的は何でしょうか。私たちは「主イエス様だけ」を、求めているのでしょうか。「上のものだけ」を、求めているのでしょうか。

イエス様は、山上の垂訓の中で語られたのです。

マタイの福音書 6章20節

**自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。**

と。

私たちの心の宝は、天にあるでしょうか。ダビデのように、「地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。(詩篇 73：25後半)」とすることができるのでしょうか。

私たちの「心の目」は、イエス様にだけ向けられているのでしょうか。

ちょっと面白いことばが書かれています。ソロモンの書いたことばです。

雅歌 1章15節

**ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ。**

鳩はただひとつのものしか見るができないそうです。ここで主は、主イエス様に属する者に向かって、主の花嫁に向かって、「あなたはなんと美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ」と、み声をかけておられます。

「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分とまったく一つになっている人々に御力を現わしてくださる」(第二歴代誌 16：9)とあります。

私たちの「心の目」が向けられているところに、私たちの心も宝もあります。「主よ、私自身は自分のために何も求めません。私の願い、私の望みはすべてあなたにあります」と言いたいものです。

イエス様は、マタイ伝6章24節で言われました。

マタイの福音書 6章24節

**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。**

私たちは主に仕えているのでしょうか。それとも、この世に仕えているのでしょうか。私たちは上のものを求めているのでしょうか。それとも、地のものを求めているのでしょうか。この両方に兼ね仕えることはできません。この二つを混ぜ合わせることは、主がお喜びになりません。

旧約聖書の中に出てくるアブラハムの親戚だったロトという男は、主に喜ばれない道を選んだのです。意識して選んだのです。彼はもちろん主を信じる者だったのですが、この世のものを求め、心地良い生活を求め、自らの道を選んだのです。「主よ、導いてください」という気持ちが無かったのです。善悪をわきまえずに、彼はソドムに行き、この世と妥協し、罪を犯し、不安の中に陥りました。

けれど、彼の親戚であるアブラハムは、ただ天を見上げ、主だけを目指して歩きました。その結果、彼は贅沢な生活はできませんでしたが、心は王者の生活をし、主の豊かな祝福のうちに歩きました。

創世記 18 章にちょっと不思議なことばが書かれています。

創世記 18 章 17 節

主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。

主はアブラハムに光を与え、ご自分のご計画をすべてお示しになりました。アブラハムとロトを比較してみてください。私たちは、どちらに似ているのでしょうか。私たちは主のみこころをわきまえて歩んでいるのでしょうか。

前に話しましたように、ダビデのように言いたいものです。「私は自ら求めるものは、何ともありません。地上で私の慕うものは、ただあなただけです。自らは何も欲しません。ただ主よ、あなただけが外に現われ出てくださいるように」と。

主が光であられるように、私たちも光のうちに歩み、永遠に朽ちない実を結んでいくことができれば、本当に幸いです。

一つのことを、はっきりしています。「イエス様にのみ仕える」ということは、あわれな奴隷として奉仕することではなく、贖い出され、買い取られ、自由にされた者としての、大いなる特権です。

私たちはどうして主に仕えたいのでしょうか。命令され、強制されているからではなく、私たちは主の犠牲、考えられないばかりの主のご愛、また、主の恵みを一つ一つ数える時、全く自発的に、喜んで、「主のためにだけ生きたい」と心から願わないではられません。

パウロは、ローマの刑務所の中で書いたのです。

ピリピ人への手紙 1 章 2 1 節

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

了